

中林竹洞における作画と学問

学習院大学 稲埜 朋子

中林竹洞(1776~1853)は、19世紀前半を中心に京都で活躍した、尾張出身の文人画家である。山水画を中心に清閑で画格の高い作品を手がける一方、30種にのぼる幅広い内容の著書をのこし、作画と学問を並行して行うという姿勢を貫いた学究肌の画家であった。竹洞作品の特徴ともいえる整理された理知的な構図や、型を重視する作画態度には、画家のこうした性質が少なからず反映されていると考えられる。

竹洞の画業は60余年の長きにわたるが、そこから絵画様式上の大きな変化を見出すことは容易ではない。なぜなら、竹洞の場合、常にある一定の型を守りながら、その範囲内で少しずつ変化が生じていくからだ。

そのような中で、最晩年にあたる弘化・嘉永年間(1844~54)の作品には、明らかな様式上の変化が指摘できる。「東山隠士」及び「沖澹」落款が使用され始める70歳前後から、筆数を極端に減らした情趣あふれる作品群が登場し、それまでの竹洞作品に顕著であった中国絵画の影響が払拭された、竹洞自身の絵画世界が創出されるのである。その穏やかでさっぱりとした画風からは、この時期に愛用した「沖澹」号への意識が感じられ、自我を超えた無欲の境地に到達することを願う画家の姿が読み取れる。

興味深いことに、こうした変化が表れるのは、竹洞が絵画制作の比重を減らし、執筆活動に専念していく時期と重なる。最晩年に著された竹洞の書物のうち、絵画関係は三分の一にすぎず、残りは神道や歌学、思想等、絵画とは無関係の内容を扱うものである。このことから、竹洞の関心が学問の探究へと向かっていたことが理解され、最晩年は絵画制作や俗事からある程度の距離を置いて、思索に耽ったと考えられるのである。

本発表では、最晩年に見られる画風の変化に注目し、そのような転機がもたらされた背景について考察する。結論からいえば、文政13(天保元)年版『平安人物志』「文人画」部の筆頭に名前が掲載されて以来、京都における竹洞の人气が高まり、職業画家として多忙を極めた反動として、こうした思想的・絵画様式的変化が引き起こされたと考えられる。理想と現実の乖離に苦悩する老齢の画家が、いかにして転機を迎えたか。そこに至るまでの過程を注視し、学問が画業に及ぼした影響について検討したい。

竹洞は尾張在住時代、禅理に通じた父の影響を受けて参禅する一方、当時盛んに行われた本居宣長一派の国学を修め、京都移住後は儒学に開眼して儒学者たちと親交を結び、後年は神道にも傾倒した。最晩年の大きな画風の変化を起点として、竹洞における作画と学問の関係、及びその意義について検討し、ひいては画家が抱いた作画理念や、理想とした絵画世界の一端を明らかにする。